

流行と関係なく学ぶ日本

カタリナさん(仮名)は東京のある大学で学ぶドイツ人留学生である。日本の大学院で修士号を取得することを目指し、現在、猛勉強中である。日本に来る前からドイツで日本語や日本文化を学んでいた。ドイツでは「日本学」(Japanology)を専攻していた。だが彼女が日本学を学ぶようになってきたきっかけは少々変わっている。

彼女はドイツで大学に進学する以前、昼間は保育園で働きながら、夜間高校に通っていた。高校を卒業し、大学に進学しようと考えたときに、インターネットでいろいろな大学の授業内容を調べたそうである。そしてなぜか、日本学を専攻することに決め、ハイデルベルク大学に進学した。日本学を専攻しようと思った理由は「日本について何も知らなかったけれど、面白そうだと思ったから」。

ドイツでも日本学や日本語を勉強する学生は少なくない。ハイデルベルク大学にも何人かの学生が進学してきた。そんな学生の多くは、大学進学以前から日本文化に興味をもち、日本学を専攻する。なかでも日本のアニメやマンガはドイツでも人気がある。そうしたアニメ好きやマンガ好きの若者が日本学の専攻を希望するのである。またドイツの大学では、学生は主専攻と副専攻を決め、専門分野をふたつ勉強することが求められている。そのため経済学を主専攻とする学生のなかにも、日本や東アジアの経済発展を勉強するために、副専

日本のいろいろな学び方

市川 哲 (いちかわてつ)

本館機関研究員

外国人として生きる



クリスマス時期に街を散策するカタリナさん

留学生の友人と茶道を体験

書店で日本の小説を探す

攻を日本学にする者が多い。だが彼女は日本のアニメもマンガについても全然知らず、日本経済にも特別な興味をもっていない。サブ・カルチャーと経済発展は海外における現代日本のイメージを代表するものであるが、彼女はそうした「流行の」日本イメージに流されずに日本研究を志したのである。

関西弁についての論文執筆

カタリナさんは大学では日本語、日本文学、日本の歴史等を学んだ。勉強は楽しかったが、特に日本学に一生打ち込もうとしていたわけではない。それでも、大学三年生になると、彼女に日本に留学するチャンスが訪れた。ドイツではハイデルベルク大学以外に、チュービンゲン大学にも日本学の専攻がある。このチュービンゲン大学は毎年、自校の学生を日本に留学させるが、このとき、たまたま定員が満たされなかったため、ハイデルベルク大学の学生の彼女がその留学生枠に入ることが可能になったのである。

彼女はチュービンゲン大学の学生たちとともに、京都のある大学でも日本語を勉強することになった。彼女が日本に来たのはこれが初めてであった。しかもドイツでは日本食を食べたことすらなかった。じつは彼女が初めて食べた日本料理は、日本に来る際に乗った飛行機の機内食で出されたソバだった。

京都で彼女はいろいろな日本の文化に

調べ、京都弁や大阪弁の違いの比較研究をおこない、論文としてまとめた。

再び、日本へ留学

これを機にチュービンゲン大学の修士課程に進学し、さらに日本の大学で国費留学生として勉強することになった。彼女が現在留学している日本の大学では、留学生は世界各地からきており、中国、インドネシア、フィリピン、韓国、フランスなど、さまざまな国の学生とともに勉強している。ドイツで日本学を勉強していたときには、そのように世界各地の学生と一緒に勉強することはなかった。だが彼女にとっては、世界各地の学生とともに日本語を勉強する状態は別に特別なものではないようだ。むしろ、それぞれ出身国は異なるが、日本語や日本文化を勉強したいという目的は皆同じであり、自分の出身国が懐かしいといったことや、日本語を学ぶうえで難しさ、外国人として日本で暮らすうえでの困難など、日本人に相談してもなかなか理解してもらえない問題を共有している。例えば、日本の大学の授業は、当たり前ではあるが、日本人学生のためのものである。だが外国人留学生は、日本語に不慣れで日本文化の背景を知らないために、完全に授業を理解できないこともある。こんな時、他の留学生と話し合うことで、皆同じような問題があるわけではないことを確認すること

接することができた。そのなかのひとつは、以前から興味をもっていた弓道である。弓道を習うのは楽しかったが、困難なこともあった。弓道の技術や弓道用語などが、難しい。だが、特に大変だったのは、弓道の練習中に先生が話す関西弁がなかなか理解できなかったことである。先生が話すことは、弓道教室の先輩が「普通の」日本語に訳してくれた。彼女がハイデルベルク大学で習った日本語は、いわゆる標準語であった。だが京都での暮らしは、同時に関西弁の世界で暮らすことを意味していたのである。

こうして彼女は少しずつ関西弁を覚えていった。例えば、「高うなる」という関西弁を初めて聞いたときには、「たこ」という名詞と「なる」という動詞のふたつからできた表現だと思い、「たこ」という語を辞書で引いて調べてみたが、それらしい項目は載っていなかった。それで知り合いの先生に聞いて、初めてこれは関西特有の表現だということがわかった。

京都に五カ月住んだ後、彼女はドイツに帰国し、日本学を勉強し続けることを決意した。大学もハイデルベルクからチュービンゲンに変更した。帰国後、彼女はチュービンゲン大学の日本学の授業で、京都で見た関西弁について発表する機会をえた。発表は好評で、指導教授は京都に留学する他の学生のために、彼女に何度も同じ発表をすることを求めた。さらに関西弁について卒業論文を書くことをアドバイスした。こうして日本の方言についていろいろと

ができる。このような問題は、なかなか日本人には理解してもらえないようである。

彼女は現在、日本とドイツの戦前の教育を比較研究している。日本の大学で教育学のゼミに所属し、勉強しながら気づいたことがいくつもある。そのうちのひとつは、日本の大学では学生の研究テーマが必ずしも所属する専攻と一致するわけではなく、むしろそれが普通だということである。彼女のように日本とドイツの教育史の比較研究、というオーソドックスなテーマだけではなく、教育以外の日本の社会問題や流行文化等をテーマとしてとり上げる学生もいる。このような研究テーマの多様性は、ドイツと日本の大学の違いのひとつであると彼女はいう。また、日本とドイツの第二次世界大戦に対する認識の違いにも驚かされている。ドイツでは第二次世界大戦に対する学生の意識は現在でも高いが、日本の学生は第二次世界大戦のことについてあまり知らず、問題意識も高くない。

カタリナさんに限らず、日本で暮らし学ぶ外国人は、皆それぞれ異なった背景と、共通した問題を抱えている。日本に留学し生活する外国人は、今後も増え続けるだろう。そして留学生たちはそれぞれ立場や興味にしたがって、さまざまな方法で日本語や日本文化を学んでゆくことになるだろう。日本をどのように学ぶのか、そして日本でどのように暮らすのか、その方法もこれからどんどん多様化してゆくのだろう。